

母の秘密と娘のまなざし

松本侑壬子・ジャーナリスト

眉山(びざん)とは、徳島市にある眉のように柔らかな稜線の美しい山。原作は、人気シンガーソングライター・さだまさしの同名の小説である。さだといえば、あの“女性の時代に物申す”的な大ヒット曲「亭主関白」を連想してしまうムキもあるが、今や売れっ子小説家でもあって、本作が映画化3作目とか。今回は亭主関白ならぬ最期の日まで毅然と生きる母と娘の絆を描いている。

東京で旅行代理店に勤める咲子(松嶋菜々子)は、故郷徳島でひとり暮らしの母が入院との知らせを受けて急遽帰郷する。かつての“お嫁さんにしたい女優No.1”のイメージが吹っ飛ばすほどビシバシとさばけた中堅キャリアウーマンぶりを発揮する“新鮮な”松嶋の演技。しかし、駆けつけた病院では、そんな咲子も真っ青の、入院患者の身ながら担当看護師を叱りつけ説教する母・龍子(宮本信子)の相変わらずの強気な姿があった。

東京・神田生まれの母は「神田のお龍」と呼ばれる生粋の江戸っ子気質丸出しで、正義感が強く言いたいことはその場で言って後はさっぱりというタイプ。周囲の人から信頼を集めもするが、煙たがられもする。永らく営んできた小料理屋をたたむことも、ケアハウスに入所することも、一人で決めてしまい、娘の咲子には何の相談もない。ご立派!ではあるが、咲子にしてみれば、あまりにも寂しく腹立たしくさえある。まして、担当医から母の病名を末期ガンと告げられると、身の置き所もなく心細くなる咲子だった。何気ない看護師の一言にすらぐさりと傷つく母と娘。

そんな咲子に思いがけず優しい言葉をかけてく

れたのが、若い医師・寺澤(大沢たかお)だった。

病院の屋上の物干し場で、市内の遊歩道で、眉山で、さり気なく寄り添い、咲子の吐息ごと気持ちを受け止めてくれる寺澤に心を開いていく咲子。寺澤から、母が医大の解剖実習のための死後献体まで申し出たと聞き、問いたださずにはられない。「なぜ、お母さんは私のお父さんのことを話してくれないの?」。しかし母は「結婚してないけど、大好きな人の子だからお前を産んだの。あの人は亡くなったんだよ」といういつもの返事を繰り返すばかり。納得いかないままに父への思慕は募る。

そんなとき、咲子は人づてに母の死後受け取るはずの自分宛ての小箱を渡される。恐る恐る開けた中には、龍子宛ての分厚い手紙の束と見知らぬ男性と写った母の写真が1枚。裏に「1971年6月15日眉山」と記されている。母は結婚できない恋人との思い出の地で、咲子を独りで出産し育ててくれたのだ。咲子がついに手紙の差出人の住所を頼りに、父を捜しに上京するが…。

心の傷も悲しみも胸一つに収めて誇り高く毅然と生きる母、強い母に時に依存し時に反発しながら結局は母の生き方を理解し受け入れていく娘—母娘の物語にあっては、恋は畢竟脇役のようだ。

それにしても、ラストシーンの阿波踊りには圧倒される。町全体がリズムに乗って沸き立っている。三十数年後に再会した母と恋人(=咲子の父)、見守る咲子と寺澤の2組のカップルの感動場面(のはず)をも飲み込む、14,200人の大群衆エキストラのエネルギー。大画面を埋め尽くす阿波踊り(本場の!)の迫力は確かに一見の価値あり!



日本映画(120分)/犬童一心監督

『眉山 - びざん -』

全国東宝系で上映中

